

相模原看護専門学校

令和2年度 公募推薦・社会人入学試験

【国語】

1 松尾芭蕉の「古池や」の俳句に関する次のA・B二つの文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で原文の一部を省略している場合がある。

A

現在、芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」はおびただしい数の外国語に訳されている。日本の代表的な詩をただひとつあげるとすれば、この句になるだろう。数々の短歌、俳句、あるいは現代詩の名作とくらべても、この句のもつ不思議さにはおよばない。外国人の詩の概念を超越しているのである。

外国人で「古池や」を最初に訳し、出版した栄誉は※₁小泉八雲のものである。

八雲は『異国情趣と回顧』（一八九八年）のなかで、「蛙」（このタイトルもFrogと複数になっている）の章をもうけ、万葉集の蛙の歌などを訳し、大阪に住む俳人の※₂露石（水落露石のこと）は、自分の池に沢山の蛙を飼い、ときどき詩人の友を招待して、即座に蛙の句をつくらせるとエピソードを書き、※₃山崎宗鑑作の「手について歌申しあぐる蛙かな」などを引用して、「古池や」を訳している。ほかの和歌や俳句は作者名をあげていないが、さすがにこれだけは名をあげ、「芭蕉の原句は見事な手柄をあげたものだが、英語であらわすのは、不可能でないとしても、むずかしい」とことわって訳している。その英語は、きわめてぶっくらぼうなものであった。

古池——蛙が何匹も飛び込む——水の音

Old pond —— frogs jumping in —— sound of water

八雲は、この俳句が後年西欧で有名になるとは 1 知らなかっただろう。

いずれにしても、八雲は蛙を複数にした。これでは、古池に蛙がピョンピョン飛びこむことになる。

八雲は俳人水落露石が池に蛙を沢山飼っていたことを述べているから、それを念頭において、複数にしたのかも知れない。あるいは松江に住んでいたころ、池に蛙が何匹も飛びこむのを見ていて、その記憶があつたのかも知れない。

蛙は群衆行動をするものだ。一匹が飛びこめば、それにつづいて他の蛙も飛びこむのが普通である。

しかし日本人の解釈はちがう。この句は、春になって蛙が一匹池に飛びこみ、芭蕉はその音を聞いて、ああ、春がきたなあと思つたのである。

2

啓蟄けいちちうの季節の句であり、一匹飛びこんだ音のあと、またおとずれる

3

も暗示されてる。

この句が独創的であつたのは、それまでの蛙の和歌や俳句がすべて、声だけを問題にしていたのに、芭蕉ははじめて蛙が飛びこんだ音をとりあげたからだというのも定説である。

しかし4日本人はこの句を聞いて、なぜ一匹だと思ふのだろうか。

※4 佐藤紘彰さとうひろあき氏の多数の英訳例で、蛙を複数にしているのは、小泉八雲とアメリカ文学者で詩人の金関寿夫かねせきひさお氏だけである。八雲は無意識に訳したのであるが、金関氏はひとつの主張をこめて複数にしたのだろう。蛙がピョンピョン飛びこんだほうが面白と考へたにちがいない。5 高浜虚子たかひまきよこも、この句は春気躍動の句であるといっている。

日本語は特別な必要がなければ、単数と複数を明示しない。中国語も同じである。明示しなくとも、われわれは日常生活で不便を感じない。「昨日、昔の友人に出会つた」といえば、それは普通一人の友人であつて、複数の友人ではない。

しかし英語その他のヨーロッパ語では、こういう場合に、かならず単数か複数が明示される。そして動詞や形容詞もそれに応じて変わってくる。そういう言語を使っている民族は、いつも単数か複数が自然に言葉になつて出てくる。もちろん、sheep(羊)や carp(鯉)のように、単複同形のものもあり、不可算語のように数えられない言葉もあるが、大部分の名詞は冠詞その他によつて単数か複数を明示しなければならない。

しかし日本語にその必要はない。

一番に案山子あかやまこを倒す野分のぶかな

※5 許 六

では、かかしも野分も複数か単数かわからない。しかしこの俳句を読んで、いくつものかかし、いくつもの野分を想像する日本人はいないだろう。ところが、外国人はそうでもないらしいのである。

この俳句の英訳には、かかしも野分も複数になっているのがあり、*。ヘンダーソンは次のように指摘している。

俳句の誤訳は、日本語の名詞が複数も単数も同形である事実による場合が多い。許六の「一番にかかしを倒す野分かな」で、かかしと秋の嵐野分が複数形では、間違いである。俳句を読みなれた読者は、俳句が一般化しないことを知っているから、許六が特定のかかし、特定の嵐を指しているにちがいないとわかるのである。

(ハロルド・G・ヘンダーソン『俳句の作り方』)

ヘンダーソンは、俳句がある特定の状況下にある、特定のものを詠む詩であることを、アメリカの読者に教えている。俳句は一般化しないともいつている。つまり **6** なことはいわないのだ。

「俳句は一般化しない」というのは、俳句の本質をついた言葉だ。たしかにかかしが複数、野分が複数では、あちらこちらのかかしが、あちらこちらの野分によって倒されるものだという意味になる。また、焦点もさだまらない。俳句は焦点を重んずる詩である。

現在、アメリカで芭蕉の言葉として流布している俳句の定義に、「俳句とは、この場所で、この瞬間に起こりつつあるもの、そのものである」(こんなことを芭蕉はいつていない)というのがあるが、それとの関連もあつて、ヘンダーソンは許六の句をあげ、「俳句は一般化しない」と述べたのだろう。

日本語は単数と複数を明示しないから、**7** その曖昧性に短歌や俳句は依存し、それがよい効果をもたらすともいえる。

心なき身にもあはれはしられけり しぎ 鳴立つ沢の秋の夕暮

西行

このしぎは何羽なのか。筆者にはどうも二、三羽のように思える。しぎの生態を知らないが、そんな気がする。

(佐藤和夫『海を越えた俳句』より)

- ※1 小泉八雲（一八五〇～一九〇四）：本名はラフカディオ・ハーン。作家・英文学者。ギリシャ生まれのイギリス人。
- ※2 水落露石（一八七二～一九一九）：明治―大正時代の俳人。
- ※3 山崎宗鑑：室町後期の連歌師・俳人。
- ※4 佐藤紘彰（一九四二～）：アメリカの翻訳家。二〇〇六年にアメリカに帰化した。
- ※5 許六（一六五六～一七一五）：森川許六。江戸中期の俳人。
- ※6 ヘンダーソン（一八八九～一九七四）：アメリカの学術・美術史家・日本研究家。俳句を英訳した著書『An Introduction Haiku』（一九五八）によって欧米での俳句の受容に貢献した。

B

I 「古池や蛙飛こむ水のをと」という芭蕉の有名な俳句がある。いうまでもなくこの俳句の主役は音である。だが、**8**その音も「ボチャン」とか「ボチャン」ではつまらない。それは丁度、水に飛び込んでいる蛙の絵や、そのまわりに丸く画かれた波紋を連想するくらい馬鹿気している。僕等の感性は**A**日常知らぬまに汚されているもので、そういう汚れた感性でこの句を受けとつたら、むしろ滑稽になってしまう。

II いうなら、古池や蛙の姿など見なくともいいのである。ただ耳だけの世界がそこにある。蛙の飛び込んだ水の音、つかの間の余韻、そのかすかなききとり難いものを追って耳は限らない静寂に出会っていく。「古池」という言葉は、この限らない静寂のために絶対欠かすことが出来なかったというふうに見える。

III そういふ芭蕉の耳はまた、「閑^{しづか}さや岩にしみ入蟬の声」という俳句を生んだ。蟬の声を「しみいる」ときいた耳は並大抵ではないが、もちろん蟬は油蟬か桜蟬（＝ニイニイ蟬）であろう。夏の山の中などで大きくその声は、とても「閑さ」などといえたものではない。けれどもそうして激しく耳を打っているうちに、やがて耳鳴りのように無感覚になって、いつの間にか深い**イ静寂**にとり囲まれていく。だがその静寂を意識すれば直ちに蟬の声が耳にもどってくるといった、**9**の間を去来する遠近の感情を僕らがよく知っているから、「岩にしみ入」という句に圧倒されるのではあるまいか。芭蕉の耳はそ

の遠近を実感として捉えた。凡庸な耳では到底ききとることの出来ぬ変化を、眼前の岩にしみいるウ響きとききわけたというふうである。

IV これらの俳句から、僕等は芭蕉の音に対する感性を窺い知ることができるとしてまたその感性は、芭蕉の俳句を愛している僕等に通じ、芭蕉以前の古い日本の耳に通じているに相違ない。それを一つの音に没入することの出来る耳、あるいは閑寂の工繁張を知る耳といってもいいだろう。それは近代音楽を生み出したヨーロッパの耳とも、好んで打楽器の刺戟的な響きを打ち鳴らすたぐいの東洋の耳とも異った、ある独自の感性を明かしている。

V このことは梵鐘一つを見てもわかる通りで、日本のように山に囲まれた土地の多い国では鐘の響きが霧のようにあたりに立ち込め、うずを巻きながらゆっくりと無限の空間に吸い込まれていく。寺男は、その消えていく頃合を見計らってまた次の鐘を打つのである。それは非常にゆるやかなリズムをつくり、鳴る鐘の音よりはむしろ才余韻そのものを楽しむといった趣がある。

(小倉朗『日本の耳』より)

問一 Aの文章中の空欄

1

に入る副詞として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア あたかも
エ いやしくも

イ はたして
オ むしろ

ウ つゆ

問二 Aの文章中の空欄

2

に入る表現として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 地中にひそんでいた虫などがはい出す
イ 雪解け水が清流に流れ込む

- ウ 池のほとりの木々が芽吹きはじめ
- エ 日脚が一日一日と長くなり始める
- オ 冬物の上着をしまうことができる

問三 Aの文章中の空欄 3 に入る語として最も適切なものを、Bの文章中の傍線部ア～オのうちから一つ選べ。

問四 Aの文章中の傍線部4「日本人はこの句を聞いて、なぜ一匹だと思っのだろうか」という問題提起の答えに相当する内容をBの文章中に求めた場合、どの段落が最も適切か。次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア I 段落
- イ II 段落
- ウ III 段落
- エ IV 段落
- オ V 段落

問五 Aの文章中の傍線部5「高浜虚子」の師で、明治時代に短歌・俳句の革新運動を展開し、写生説を唱えた人物は誰か。次のア～オのうちから一人選べ。

- ア 向井去来
- イ 河東碧梧桐
- ウ 水原秋桜子
- エ 正岡子規
- オ 与謝野鉄幹

問六 Aの文章中の空欄 6 に入る語句として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア 具体的
- イ 抽象的
- ウ 空想的
- エ 断定的
- オ 定型的

問七 Aの文章中の傍線部7「その曖昧性に短歌や俳句は依存し、それがよい効果をもたらす」とあるが、「よい効果」とはどのような効果か。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア 単数と複数を明示しないことによって、不特定の要素をも許容して解釈できるという効果
- イ 英語などへの翻訳の難しさが、かえって俳句の持つ日本的な情緒を醸し出せるという効果
- ウ 日本の伝統的感性を体得しているものだけが俳句の持つ独特の趣を感受できるという効果
- エ 単数か複数かという問題に煩わされることなく、自然に心にしみいつてくるように感じられる効果
- オ 和歌や俳句の受け手がさまざまな想像をめぐらして解釈できる自由を許す面白みがあるという効果

問八 Bの文章中の傍線部8「その音も『ポチャン』とか『ポチャン』ではつまらない」とあるが、その理由として適切でないものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア あまりにも日常的で平凡な擬音語にすぎないから。
- イ 蛙の絵や池の波紋のような視覚的な要素を連想させてしまうから。
- ウ 音の余韻のようなものを感じさせてくれないから。
- エ 日常の中で無意識的に汚された感性で受け取っているから。
- オ 単純で表面的な受け止め方にすぎないから。

問九 Bの文章中の空欄

9

に入る語句として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア 視覚と聴覚
- イ 感覚と無感覚
- ウ 近景と遠景
- エ 静寂と喧噪
- オ 意識と無意識

問十 Bの文章の内容に合致するものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア 「古池や」の句は、蛙の飛び込んだ水の音だけを詠むことで、蛙の姿を忘却させることに成功している。
- イ 「閑さや」の句において、芭蕉は静寂を意識することによって蟬の声を眼前の岩にしみいる響きとしてききわけた。
- ウ 「閑さや」の句は、凡庸な耳ではききとることのできない響きを表現しているために私たちを圧倒する。
- エ 芭蕉の音に対する感性は、芭蕉だけに限らず時代を超えて日本人の独特の感性に通じているものがある。
- オ 日本の寺の鐘の響きは、鳴る鐘の音一つ一つに耳の注意を集めるかのようにゆっくりと無限の空間に吸い込まれていく。

問十一 松尾芭蕉の作品を、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア 新花摘
- イ 奥の細道
- ウ 病床六尺
- エ 土佐日記
- オ おらが春

2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で原文の一部を省略している場合がある。

われわれ現代人に¹著しく弱まっている人間的能力はなにかといえ、なによりも記憶力であろう。現在ひとは、なにごとにつけても自分で覚えていようとせずに、システム手帳や電子機器に任せようとする。これらは〈記憶の外化〉の趨勢の表われである。昔から人間は、自己の技術的な能力や器官を²道具や機械として次々に外化してきた。その道具や機械が神経系統や予能力に類するものまで持つようになって、情報機器による〈記憶の外化〉が本格的に行なわれるようになった。

A

、いちばんの問題は、われわれ人間が記憶を単にさまざまな機器に委ねることではない。そうではなくて、

3

ことである。では、機器に委ねられないような種類の記憶力とはなにか。

それは〈想起〉し〈再認〉する能力である。『物質と記憶』のなかで^{※1}H・ベルクソンが〈純粹記憶〉と呼んだのは、人間の持つそのような想起・再認の能力のことであった。

コンピュータ時代において、⁴この想起的記憶は人間にとって特別な意味を持っている。そのことをよく表わしているのは、^{※2}フィリップ・K・ディックの原作になるSF映画「ブレイドランナー」の一場面である。破壊と乗っ取りを目的として地球に潜入した複製人間の正体をテストする場面である。知力にすぐれた複製人間は、いろいろな知能テストにパスしたものの、結局最後に、昔の思い出、幼いときの思い出を想起できるかどうかが決め手になって、正体があらわれるのである。

ベルクソンの記憶論に戻っていえば、彼は、こう言っている。記憶には二つの種類のものがある。一つは身体運動の反復によって得られる〈習慣的記憶〉であり、この場合には経験は表象されない。もう一つは、自発的な〈純粹記憶〉であり、この場合には、精神が過去を表象として想起する。

B

習慣的記憶と純粹記憶とを分類した場合に、後者を機器に委ねることは不可能であろう。想起的な純粹記憶は、思い出されるのは個々の事物であっても、イメージの全体としての世界にかかわっているからである。

基本的にベルクソンのこの想起的記憶の考え方にのっとりつつ、思い出の持つ意味をいっそう鮮やかに示しているものに、

^{※3}小林秀雄の次のことばがある。《思ひ出が、僕等を一種の動物である事から救ふのだ。⁵記憶するだけではないのだらう。思ひ出さなくてはいけないのだらう。多くの歴史家が、一種の動物に止まるのは、頭を記憶で一杯にしてゐるので、心を虚しくして思ひ出す事が出来ないからではあるまいか。／上手に思ひ出す事は非常に難しい。》（「無常といふ事」）

ここには、思い出が精神的な純粹記憶として、動物的・機械的な記憶と対比されて鋭くとらえられている。ベルクソンの純粹記憶もそうのだが、これらの場合、想起的記憶だけが精神の記憶とされ、そこから身体的なものもまったくaハイジヨされている。が、想起的記憶はまったく身体から切り離せるものであろうか。いうまでもなく、人間は心身の高次の統合体であり、いまや人間において、精神とは、活動する身体のことだと見なされている。そして、記憶がbニナうイメージ的な表象は、つまりは、身体的なものを基盤とした感性的なものだからである。

記憶の働きは近代の知からハイジヨされたが、それには、それなりの理由があった。それまでの歴史の拘束や重圧から逃れ、共同体から個人が独立するためには、どうしても過去との繋がりを断ち切る必要があった。そのとき新しくcヨウセイされたのが、デカルト的な意味での〈方法〉であった。方法とは、記憶や習慣によらずにわれわれを真理に導くものでなければならなかった。〈方法〉をそのように位置づけるヒントを私が得たのは、^{※4}フランシス・A・イエイツの『記憶術』(一九六六年)からである。

イエイツはデカルト的な意味での〈方法〉について立ち入って述べてはいないが、面白いのは、デカルト自身が〈記憶力〉の弱さをたいへん気にしていたことである。彼は〈私はつねに、他の何人かと同じように、(…)豊かで、なんでもすぐに思い出せる記憶力を持ちたいものだと願った〉、と『方法序説』の初めのところで書いている。デカルトはそのため、〈記憶術〉に代わって、確実な前提から出発し、論理的なdレンザによって物事をその原因から演繹的にとらえていく〈方法〉を打ち立てたのである。〈方法〉とは習慣の反対物である^{※5}と^{※6}G・バシユラールも『適用された合理論』(一九四八年)のなかで述べている。

C、〈方法〉は科学的思考や科学に基づくテクノロジーと結びつくのである。その意味で、近代とは、まさしく〈方法の時代〉であった。ところが、^{※6}P・ヴァレリーのいう〈方法的制覇〉が進み、eカンテツして、自然的・文化的環境を破壊したため、人びとは自己の存立基盤の喪失を痛切に感じるようになった。そのため、生存の基盤と密接に結びついた記憶の問題をもう一度考え直さざるを得なくなったのである。

(中村雄二郎『術語集II』より)

- ※1 H・ベルクソン（一八五九～一九四二）：フランスの哲学者。
- ※2 フィリップ・K・ディック（一九二八～一九八二）：アメリカのSF作家。
- ※3 小林秀雄（一九〇二～一九八三）：昭和を代表する批評家・文芸評論家。
- ※4 フランシス・A・イエイツ（一八九九～一九八一）：イギリスの思想史家。
- ※5 G・バシュラール（一八八四～一九六二）：フランスの科学哲学者・文学批評家。
- ※6 P・ヴァレリー（一八七一～一九四五）：フランスの詩人・批評家。

問一 傍線部 a～e に相当する漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の ア～オ のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

- a ハイジヨ
- ア 組織へのハイシン行為。
 - イ 産業ハイキ物の処理をする。
 - ウ 村社会はハイタ的な雰囲気がある。

- エ 予選でハイタイしてしまう。
- オ 色のハイゴウが悪いデザイン。

- b ニナウ
- ア 彼には何かコンタンがあるに違いない。
 - イ 悪事にカタンする。
 - ウ タンパクな味わいの白身魚。

- エ 要点をタンテキに言い表す。
- オ 優勝を逃してラクタンする。

c ヨウセイ

- ア 欲望をジセイすることが大切である。
- イ キセイの観念にとらわれる。
- ウ 来年のウンセイを占う。
- エ 食欲がオウセイになる。
- オ 免許の登録をシンセイする。

d レンザ

- ア 道路をフウザする。
- イ 首相が議会の解散をシザする。
- ウ 二つの直線がコウザする。
- エ 上司の仕事をホザする。
- オ 所持品をケンザする。

e カンテツ

- ア 放置自転車をテツキョする。
- イ センテツたちの教えを守る。
- ウ 各地にセイテツ所が造られた。
- エ 不祥事を起こした大臣をコウテツする。
- オ テツヤをしたので体調が悪い。

問二 傍線部1「著しく」とあるが、これと同じ意味で「著」の字を使っている熟語の組合せとして最も適切なものを、後のア～オのうちから一つ選べ。

- ① 著名
- ② 著作
- ③ 著述
- ④ 顕著
- ⑤ 共著

ア ①と③

イ ①と④

ウ ②と③

エ ③と④

オ ④と⑤

問三 本文中の空欄 A C に入る語として最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選べ。

ア しかし

イ つまり

ウ このように

エ さらに

オ だからこそ

問四 傍線部2「道具や機械として次々に外化してきた」とあるが、次のア～オの道具や機械のうち、本文にいう「外化」にあたらぬもの一つ選べ。

ア ブルドーザー

イ 自動車

ウ 電子計算機

エ 飛行機

オ コピー機

問五 本文中の空欄 3 に入る言葉として文脈上最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア 機器に委ねられないような種類の記憶力までも、記憶の外化とともに衰弱させている
- イ 記憶を機器に外化させる過程で、機器に委ねられないような種類の記憶力までも外化の対象としている
- ウ 機器に委ねることができる種類の記憶力と委ねられないような種類の記憶力の区別ができなくなってしまう
- エ 機器自体の性能によって、機器に委ねられないような種類の記憶を生じさせてしまっている
- オ 機器に委ねられないような種類の記憶力が存在することを忘れてしまい、人間自体が機械化してしまう

問六 傍線部4「この想起的記憶は人間にとって特別な意味を持っている」とあるが、そういえるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

- ア 人工知能によって想起的記憶までもコンピュータが再現できるとなると、人間の存在そのものを侵す危険性があるから。
- イ コンピュータがより普及する社会においては、想起的記憶の能力を磨くことだけが人間の尊厳を守ることになるから。
- ウ 想起的記憶の能力の存否が、人間とコンピュータを内蔵した複製人間とを区別する重要な指標となるから。
- エ 想起的記憶をコンピュータを内蔵した複製人間に付加できるかどうか、人間の幸福を表現する道になるから。
- オ 想起的記憶を機器に委ねるのは不可能であることの自覚が、人間をコンピュータへの依存から脱却させてくれるから。

問七 傍線部5「記憶するだけではいけないのだらう。思ひ出さなくてはいけないのだらう」という小林秀雄の言葉を本文に即して解釈すると、どういう意味になるか。最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 想起的記憶だけに頼ってはいけない。習慣的記憶と想起的記憶の両方を磨くことが人間を単なる動物に止まることから脱出させる。

イ 習慣的記憶に止まってはいけない。身体的な想起的記憶だけを動物と異なる人間の記憶として重視するべきである。

ウ 想起的記憶を身体から切り離してはいけない。身体的なものを基盤とした感性的な想起的記憶が必要である。

エ 動物的・機械的な習慣的記憶だけに頼ってはいけない。想起的な純粹記憶こそを人間の記憶として大切にしなければならぬ。

オ 習慣的記憶では人間は一種の動物に止まる。人間の記憶はすべて想起的な純粹記憶である必要がある。

問八 本文の内容と合致するものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア ベルクソンの記憶論は、身体的なものをまったく考慮していない点で、小林秀雄とは異なっている。

イ 科学的思考によって人間を記憶や習慣に頼らずに真理へと導く〈方法〉が確立された。

ウ デカルトは、自己の記憶力の弱さを自覚し、記憶を補うために物事を論理的にとらえていく〈方法〉を打ち立てた。

エ 記憶の働きは近代の知において軽視されたために、人間の記憶を機器に委ねるといふ記憶の外化が促進された。

オ 人間の記憶は精神だけでなく身体とも関わっており、人間の生存の基盤と密接に結びついている。